



今月は古宿・赤岩の中津川側

こやがうち 木屋ケ内②



先

月に続き木屋ケ内。
前号で「中世の記録には小屋河内村とあり…」と書いた。江戸期になると、木屋ケ内は小家ケ内村と記され、江師四ヶ村（江師村・小石村・小家ケ内村・下道村）の一つとして、江師村庄屋の支配下にあった。小家ケ内村には「名本」が配置されていたのだが、この名本が担っていた最も大きな仕事は「お留山」の生育保護管理であった。お留山というのは以前も何度か書いたように、良質の木材を有する貴重な山として藩が指定した、いわば「藩有林」である。

お留山があったところは、明治維新後も林業が盛んだったことは、ここ木屋ケ内においても同様で、下津井から田野々へ向かう木材運搬のための軌道は、木屋ケ内でも利用された。今もその軌道跡であるトンネルが残っている。木屋ケ内本村の産土神は河内神社で、中津川左岸にある古宿地区のお宮と、赤岩地区のお宮が、昭和10年代中頃にここに合祭された。集落の方のお話では「その際は、神様をここに敷いて、それはそれは丁寧に運んだ」という。

木屋ケ内本村と古宿には茶堂跡もある。国道脇にある本村の茶堂は、別の場所にあった合常軒というお寺と合併したもので、平成10年に建て替えられた。この合常軒というお寺は、江戸期には寺子屋として、また明治の初めは授業場としても使われていた。

茶堂横を櫛原川へ降りて行くと沈下橋がある。木屋ケ内橋である。この橋ができるまでは、他の地区同様、渡し



木屋ケ内橋。橋脚に注目したい。

船で渡ったが、上流にダムが建設され、水量が激減し、舟の運行が不可能になったことで架橋された。3本の橋脚のうち2本は川の岩を利用してはいるため、強固な上にコストパフォーマンスに優れた沈下橋で、昭和28年に完成した。

さて、中之島公園について。櫛原川の中洲となっている岩場が中之島公園である。現在は訪れる人もほとんどなくひっそりとしているのだが、ここがガンバイ（軍配）トンボという、珍しいトンボの生息地となっていることはあまり知られていない。準絶滅危種とされているこのトンボは、雄の肢（足）が相撲の軍配のような形状をしていて、雌への求愛行動などの時にこの軍配状の肢をあげる。数年前に専門家が聞きつけ当地を訪れた時「これは保護すべき貴重な生息地である！」と驚いていたという。しかし、案内した地区の方は「へえ〜！子どもの頃から普通に見よったけど…」と、もって驚いたのだそっだ。

町のうごき						四万十川の水質状況			
(12月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	適正值(mg/l)	1月17日	
男	7,683	-13	男 5	16	8	10	リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
女	8,427	-8	女 4	13	10	9	硝酸	≤ 0.5	0.302
計	16,110	-21	計 9	29	18	19	アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
世帯数	8,236	-13	(12月中の届出)				アニオン活性剤	≤ 1.0	測定範囲以下
窪川地域 11,437人		大正地域 2,240人		十和地域 2,433人		化学的酸素要求量	≤ 10.0	0.25	

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部